

全国のスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校が集結

## 大学改革の方向性を見据え、グローバル教育を語り合う情報交換会を開催

2015年10月、全国からスーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校が集まり、「教育のグローバル対応に向けた情報交換会」（主催ベネッセ）が開催された。現在の高校でのグローバル教育では、生徒がグローバルに活躍するための資質・能力の育成に加え、大学改革や入試改革への対応も求められている。高校教育のグローバル化の推進役であるSGH指定校の教師が現状の課題を踏まえ、今後のグローバル教育のあり方を語り合った。

### グローバル教育の推進に向け 今後の方向性を考える場

「教育のグローバル対応に向けた情報交換会」は、教育のグローバル化を進める高校をサポートすることを目的として、2013年度に第1回を開催、14年度に文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」事業が開始した以降は、SGH指定校を中心として実施してきた。5回目となる今回を含め、全国から延べ約400校、約500人の教師が参加している。

今回のテーマは、「大学改革の方向性を踏まえたスーパーグローバルハ

イススクールの指導を考える」だ。グローバルに活躍するための資質・能力の育成はもちろん、大学改革の動向を見据え、今後のグローバル教育の方向性を考える場とした。冒頭では、ベネッセから、SGH指定校や教育委員会から多く寄せられる課題として、次の4点が挙げられた。

- ① **推進体制** 少数の教師の努力で改革を推進しているケースがある。いかに効果的な推進体制を構築するか。
- ② **探究学習・英語4技能の育成** どのような指導や評価を通して、生徒の学びを深めていくか。
- ③ **海外研修** より多くの生徒の参加

を可能にする効果的なプログラムをいかに用意するか。

- ④ **進路指導（海外大進学など）** 高校卒業時に海外大進学に挑戦する志向が定着しつつあるが、現状は指導ノウハウに限界がある。いかにグローバルな進路指導を行うか。そうした目の前の課題への対応を含め、各校のグローバル教育の推進に寄与する具体的な材料を多く得ることが、今回の会議の目的だ。プログラムは、入試改革を中心とした最新の教育改革に関するベネッセからの情報提供、東北大の花輪公雄理事による基調講演、SGH指定校2校による事例発表、そして参加校が14

のグループに分かれ情報交換を行った。その主な内容を紹介する。

#### 「教育のグローバル対応に向けた情報交換会」

- **ベネッセからの情報提供**  
「教育改革の方向性と今後求められる人材像・学力要件について」  
ベネッセコーポレーション高校事業部 山田高幹 たかもと
- **基調講演**  
「東北大学 教育改革と入試改革 現状と展望」  
東北大 理事(教育・学生支援・教育国際交流担当) 花輪公雄
- **事例発表**  
東京都・私立渋谷教育学園渋谷中学高校  
熊本県立済々黈高校 せいじゅう

\*情報交換会議資料を基に編集部で作成

## 教育改革と組織再編でグローバル教育を推進

基調講演では、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援（SGU）」の採択校である東北大の花輪公雄理事が、自学の教学改革を語った。東北大は、13年、5年後の自学のありべき姿をまとめた「里見ビジョン」を公表。その1つめに掲げた「グローバルリーダーの育成」に向け、教育改革と組織再編を進める。

教育改革では、受動的学習から能動的学習への学びの転換、学士・大学院課程を一貫するキャリア教育の構築を進める他、SGUの軸となる活動として、学内での学びと海外での研鑽を組み合わせた包括的国際理解プログラムの構築に取り組み。同プログラムは、年間2000人の学生が留学や国際体験をすることを目標として、多様な留学プログラムや



東北大 理事  
(教育・学生支援・  
教育国際交流担当)

**花輪公雄**

はなわ・きみお

英語で学ぶ専門科目を設け、実践的な語学スキルの強化を図る。

組織再編では、様々な教育組織を整理・統合し、「高度教養教育・学生支援機構」に一本化。各部署の連携と機能強化、効率化を図った。

また、同大学は多様な資質や能力を持つ学生が集まるのがグローバルリーダーの育成に不可欠と考え、早くからAO入試に力を入れ、全学部が実施している。「15年度入試では全入学者の20%がAO入試での入学

### 図1 東北大 AO入試の実施概要と特徴

基礎学力+*a* (意欲・適性・好奇心……)を評価

●基礎学力

- ・高校学業成績 (学習成績概評がA段階)  
AO入試Ⅱ期全学部、AO入試Ⅲ期法学部で出願要件に
- ・小論文・筆記試験  
AO入試Ⅲ期医学部 (医・保健)・工学部
- ・センター試験  
AO入試Ⅲ期全学部 (学部により口頭試問)

●+*a* (意欲・適性・好奇心など)

- ・志願理由書、活動報告書、面接試験、志願者評価書

\*東北大の資料を基に編集部で作成

だったが、これを数年以内に30%に引き上げる」と花輪理事は話す。

東北大のAO入試の特色は、一般入試と同じ準備をきちんとすれば合格できることにある。その入学者数や選考方法は学部委ねるが、評価事項は共通で「基礎学力+*a*」とし(図1)、学部のアドミツション・ポリシーを踏まえて選抜する。例えば、ある学部では教員の講義を受講し、それに関する筆記試験やグループ討論を行う。別の学部では最初に課題が提示され、2時間後、模造紙に考えを整理

理したものを使いながら発表をする。

AO入試枠拡大の背景には、入学者が優秀であることも大きい。「留年せずに卒業する割合やGPA(\*1)の平均値は、一般入試での入学者よりAO入試の入学者の方が高い。高校時代に日々の学習を通じて基礎学力を高め、健全な学校生活によって広い視野や好奇心を育んだ学生の入学を期待している」と、花輪理事は語る。今後は「多面的・総合的」入試のあり方も検討し、大学入試改革の牽引役となることを目指している。

実例発表1

東京都・私立渋谷教育学園渋谷中学高校(\*2)

## 教科横断、アクティブ・ラーニング型授業を実施

渋谷教育学園渋谷中学高校は、教科横断、アクティブ・ラーニング型授業を特色とする取り組みを発表した。研究テーマは、探究型学習を通



渋谷教育学園  
渋谷中学高校  
SGH委員副委員長

**北原りゅうじ**

きたはら・りゅうじ

した「行動できるリーダー」の育成だ。探究型学習では、地球的規模の問題として「人間の安全保障」にかかわる問題の発見と解決に取り組む。1年生2学期に行う「Hiroshima Project」は、国語・社会・英語を中心に教科横断型で進める(図2)。各教科の授業で基礎知識を得た後、各自で調べ学習を行い、ディスカッションやプレゼンテーション、交渉エツ

\*1 Grade Point Average の略。各科目の成績を加重平均した数値で学力を定量的に測る指標。

\*2 渋谷教育学園渋谷中学高校の取り組みは、本誌2015年6月号特集「2015年度入試に見るこれからの指導のあり方」でも紹介しています。

セイライティングなどで、調べた内容、自分の考えを発信する。

そうした過程を経て、グループごとに広島に関する英語パンフレットを作成する「Hiroshima Brochure Project」を行う。このでは、東京外国語大の留学生にアドバイスを受けるが、「多様な価値観に触れられるよう、アジアやアフリカ、中東など様々な出身国の留学生を招いている」と、北原りゅうじ先生は説明する。完成した作品は、アメリカ・フロリダ州の協力校で世界史のテキストとして使用される。同時に協力校の生徒と教師に作品を審査してもらい、12グループのうち上位2グループを協力校での5日間の研修に派遣する。

図2 「Hiroshima Project」での各教科の内容

- **国語** 『黒い雨』とハリウッド映画「比較文化論としての核」と題し、日米における核の描写の違いから、核に対する双方の考え方の相違を考察。
  - **社会** 原爆を始めとする大量破壊兵器とその規制、集団的自衛権、核兵器を取り巻く国際情勢について考察。
  - **英語** 広島に関連したテーマについて学び、東京外国語大の留学生・海外提携校と連携し、「Hiroshima Brochure Project」を実施。
- \* 渋谷教育学園渋谷中学校の資料を基に編集部で作成

2年生では、各自の関心に応じた探究学習「Social Justice Project」を行う。活動は個人でもグループでもよい。最終的には、学園祭で情報発信したり、校外でボランティア活動に取り組んだりした後、英語での報告書を作成する。15年度には、ユニセフ主催「J7ユース・サミット」の日本代表に選ばれ、各国の首相に意見書を提出したグループもあった。

「サミットに参加した生徒たちは、日本人は『シャイ』『英語への恐怖心』といった弱点がある一方、『会議では冷静で客観的』『他国とは異なる価値観を持つ』といった強みを感じたと話している。そうした弱点を克服して強みを十分に生かせる人材の育成を目指している」と、北原先生は今後の意気込みを語った。

学校全体の取り組みとするためにより多くの教科との連携・協力が必要だったが、そのために生徒の成長を示すデータを提示した。「SGH指定後、GTETCのスコアは、特にライティングやスピーキングで明らかに伸びた。そのデータを示すと、多くの教師が積極的に協力してくれるようになった」と、北原先生は報告した。

実例発表2

熊本県立済々黌高校（\*）

「グローバルキャリア課」を設置し活動を推進

熊本県立済々黌高校は、SGH推進に向けた組織改編を中心に発表した。同校は、国際的素養を備え世界をリードする人材の育成を目指し、「SGクラス」（1年生2クラス、2年生1クラス）を設置し、2つのプロジェクトに取り組み。「リサーチプロジェクト」では、「持続可能性を確保する開発と地球環境保全のあり方」をテーマに、1年生はグループ研究と論文作成、2年生から3年生にかけて個人研究で英語論文を作成する。「コミュニケーションプロジェクト」では、1年生は英語で議論や意見を発表できる力の育成、2年生は実践的なコミュニケーション力を習得すると共に、日本の文化・歴史などの教養を身に付ける。

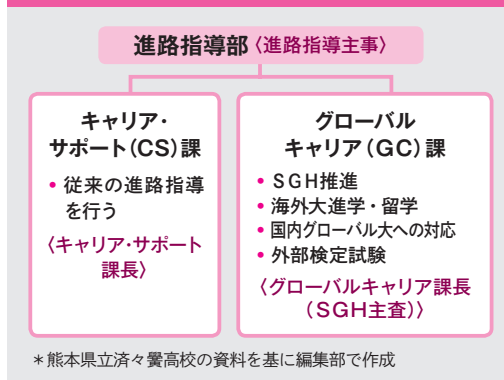


熊本県立済々黌高校  
グローバルキャリア課  
課長

鶴濱正悟  
つるはま・せいご

2015年度には、課題であった

図3 組織改編後の進路指導部



SGHの学校全体への波及に向け、進路指導部に、従来の進路指導を担う「キャリア・サポート (CS) 課」と、SGH推進や海外大進学・留学などを担当する「グローバルキャリア (GC) 課」を設定した (図3)。

GC課の大きな目的であるSGHプロジェクト推進のために、週1回、GC課の教員に加え、進路指導主事や各学年主任が参加する「GC課会」を実施。GC課会で検討された企画は、管理職なども参加する「SG企

\* 熊本県立済々黌高校の取り組みは、本誌2014年12月号特集「動機と型の質的転換を図る教科指導」でも紹介しています。

## 課題視される4テーマについて情報交換

情報交換会では、6〜7人ずつのグループに分かれて意見を交わした。

前半と後半でグループのメンバーを入れ替え、冒頭で挙げられた4つの課題を踏まえ、前半は「いかに探究学習の評価を行うか」「いかに海外研修を活用し、生徒の学びを深めるか」、後半は「いかに4技能の英語力を育成するか」「いかに国際化に重点を置くか」の4テーマを話し合った。各テーマで聞かれた先生方の意見を抜粋して紹介する。

### いかに探究学習の評価を行うか

◎2年生は1年間掛けて論文を作成して発表する。生徒が「下級生に見せたい論文」「図書館に残したい論文」などを投票する形で相互評価をしている。3年生はそれを英語で行う。

◎ルーブリックの作成を進めている。具体的な行動をしていれば「5」、大学につながるアカデミックな内容は「7」などと、数値化を想定している。

◎ルーブリックは、教師の合意を取り、形式的にしないように気を付けている。  
◎生徒のための評価なので、探究学習では生徒に還元する評価を行っている。

### いかに海外研修を活用し、生徒の学びを深めるか

◎海外研修旅行の参加希望者には、事前学習で「何を学びたいのか」を突き詰めさせ、それを基に選考している。  
◎一部の生徒しか参加できないため、帰国後に学年や全校に対して研修内容を発表させ、共有している。

◎国内の大学に留学生を増やすことも大事だ。大学の国際競争力を高めないと、世界から留学生が集まらない。論

文引用数などを見ると、英語力が問われていることを感じる。

### いかに4技能の英語力を育成するか

◎インプットしたものをアウトプットさせるため、ディベートやプレゼンテーション、ディスカッションを行う。

◎中高一貫校の利点を生かし、中学校から実践的な英語力育成に力を入れたところ、英語力が飛躍的に向上した。日本人教師はネイティブの講師の授業とどう連携させるかという視点で授業を構成し、その内容は大きく変化した。

◎1年生2学期から、環境問題などをテーマに即興型のディベートを行っている。また、学期に1回、録画をするパフォーマンステストを実施している。

◎英語を話す必然性がないと生徒は英語を使わない。留学生を招くなど、英語を使う状況をどんどん増やしている。

◎授業改善に3年間取り組み、GTECのスコアが上がってきた。今後スコアを指標の1つとしたい。

### いかに海外大への志望を育成するか

◎生徒に海外志向を強めてほしいと考え、ベネッセによる海外大説明会を実施している。

◎日本にも諸外国から留学生が大勢来ていることに気付かせるのが海外大進学への第一歩だと思う。そのことが生徒の頭のない状況が続いている。

画委員会」での検討を経て実行する。G C課と連携し、例年、各学年で実施する進路講演会にグローバルな要素が強い講師を招くなど、進路行事の「SG化」にも取り組む。大学入試改革への対応も、G C課の重要な役割だ。「多面的評価に向け、教育課程全体の中にSGプロジェクトや各種活動をどう位置付けるかを設計している」と、鶴濱正悟先生は説明する。外部検定試験では、全生徒が受検するGTEC for STUDENTSに加え、15年度からSGクラスではGTEC Speaking Testも受検することにした。更に、20年度に実施が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」に備え、読解力や論述力、思考力などを測定するタスクパフォーマンス型の「課題解決力テスト」を独自に開発し、今年度は1年生で実施した。

その他、海外大進学や留学への対応などもG C課が担う。「G C課を中心に未来型の進路指導として、グローバルなキャリア観を育みたい。更に指定終了後もG C課がSGHで培った教育資産を発展的に継承していく」と、鶴濱先生は先を見据えて語った。



SGH指定校全112校のうち、70校から82人が参加。情報交換会では、14のグループに分かれ、自校の取り組みや課題を発表した(別途、9県教育委員会、1市教育委員会から10人が参加)。